

孟浩然もうこうねんに贈るおく（李白りはく）

我われは 愛あいす 孟夫子もうふうし

風流ふうりゅう 天下てんかに 聞きこゆ

紅顔こうがん 軒冕けんべんを 棄すて

白首はくしゅ 松雲しょううんに 臥がす

月つきに 酔よつて 頻しきりに 聖せいに 中あたり

花はなに 迷まよつて 君きみに 事つかえず

高山こうざん 安いずくんぞ 仰あおぐ 可べけんや

徒いたずらに 此こに 清芬せいぶんに 揖ゆうす

吾愛孟夫子 風流天下聞
紅顔棄軒冕 白首臥松雲
醉月頻中聖 迷花不事君
高山安可仰 從此揖清芬

解説 孟浩然との見流を詠った詩。

語釈 ※軒冕Ⅱ高級官僚の乗る立派な車と、その正式な冠をいう。

※聖人Ⅱ魏ぎの曹操が禁酒令を出したとき、人々は清酒を「聖人」といい、法にふれないようにした。※清芬Ⅱ清らかな香り。※揖Ⅱ両手を前に組んで、上下に動かす敬礼のこと。

通釈 私は孟先生の人柄が好きだ。彼の風流心、風雅の心は広く天下に聞こえている。紅顔の青年時代から役人生活などは棄ててしまい、白髪になった現在では、青松、白雲を友として、大自然の中に悠々と暮らしている。月の美しさに酔っては、頻りに清酒の酔い心地を楽しみ、花に心を迷わせては、天子に使えようとしなない。孟先生の人柄はあまりにも高潔。高山の気高さにも似てふり仰ぐことさえ難しい。私はただ、その清らかな芬かおり、清々しい人柄に深い敬意を捧げるばかりだ。